
銀魂 攘夷篇

クロフォード

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

銀魂 攘夷篇

【Nコード】

N5913F

【作者名】

クロフォード

【あらすじ】

かつて、銀時・桂・高杉・坂本など、日本中の侍が参加した『攘夷戦争』。それは悲しみを生み、多くの命を奪っていった、最悪の戦争。今まで誰も語ることもなかった、銀時たちの過去。一体、銀時たちは何故攘夷に参加したのか？そして何故運命は、銀時たちを引き裂いたのか――……。銀時たちの過去が、今明かされる。

過去をほじくり返すなら 鼻をほじれ（前書き）

今回は、『銀魂 攘夷篇』を書かせていただきました。

・攘夷篇（銀さんたちの過去）は、アニメ・原作ともまだ書かれてないので、空想です。

この作品は、毎日夜8時～8時30分に投稿されます。
よろしく願います！

過去をほじくり返すなら 鼻をほじれ

今日もまた、朝早くから万事屋の大食い娘と死んだ魚のような目をした天パやる気0%男を起こしにきたダメガネ新八。

ここから万事屋の一日は始まるといっても過言ではない。

【ガラガラ！】

「おはようございまーす」

当然の如く、返事は無いのであった。

新八は気にせず、まずは大食い娘、神楽かぐらを起こしに行く。

【カララ…】

新八は客間の戸を開け、一歩足を前に踏み出した。

【グニッ！】

「……グニッ…??」

新八は人生の十余年の中でも、聞いたことの無い音と、心地悪い感触に顔をしかめながら、ゆっくり下を見てみた。

「グルルル……!!」

グニッと言う音と、心地悪い感触は、定春のしっぽを踏んだもの

だった。

「あっ あっ！定春！！ごっこ ごめん！ほんつとごめん！ワザとじゃないんだ！マジで！わかってくれるよな！ね？いい子だから……」

「グルルル……ガアアアアア！！」

「あぎゃあああああ！！」

新八の声は、朝の江戸全域に響き渡った。

朝早くからご苦労な新八だった。

「うるさいアルなあ……何やってるアルかア……」

新八の魂の叫びにより、神楽は起きた。

「あゝ？…あんだよ朝っぱらから うるせーな…静かにしろよ神楽」

銀時も、のそのそと起きた。

「銀ちゃん！ちがうヨ 新八アル！新八が叫ぶ声を聞いて 私 飛び起きたネ！ あのダメガネ！ 一体どこに行ったアルか！」

神楽がそんなことを行ってる間、銀時はずっと顔を引きつっていた。

「おい かーぐら」

「ほえ？」

「下…下」

銀時は下に指をさして言った。

「あ」

新八の頭は神楽の足に押しつぶされていた。

「いたたた…あれ？おかしいな…噛まれた場所以外のところが痛むような…」

「気のせいアルよ」

「新八ィ…お前も朝早くからご苦労なこつてエ」

「それ一回言いましたからね！さっきナレーションが言ったからね！」

新八は一息ついて、もう一度銀時のほうに向きなおす。

「コホン！ところで銀さん！今日はちょっと聞きたいことがあるんです！」

「あ？ああ…今俺達が新しい小説に出てるって事かい？」

「違う違う違う！！あんた何言ってますかアァ！！一応ここは小

説内なんだから！そーいうのは無し！」

「んだよ　ったく……だりーなア　なんでアニメと漫画と小説とで
使い分けられなきゃいけねーんだよ　俺たちだって生きてるんだよ
もつとさあ……こう……ね？　しかもこれ空知の作品じゃねーだ
ろ　適当にやればいいんだよ」

手をふりふりさせながら銀時は話した。

「あんたさっきから何なんですか……だらだらだらだとオ！」

銀時は鼻をほじりながら言い返した。

「いーじゃねーかよ　つい最近『魔王襲来篇』終わったばかりなん
だからよ」

「それダメエエエ！！そういうのも言っちゃダメでしょうがアア！」

「新八　朝早くからご苦労アル」

「うるせーよ！しつけーよ！お前らしっかりしろよ！」

それから万事屋特有の会話が続く。

新八はいったん落ち着いて、口をあけた。

「ゴホン！聞きたいことっていうのはですね……」

「あ やベエ 確かまだジャンプ買ってねエな……」

「僕の話を聞けエエエ！」

「落ち着くアルよ 新八^{ガキ}」

「神楽ちゃんもガキでしょーが！！」

「なにおう！？やんのか？オウ！？」

神楽は新八の胸倉を持ち、吊り上げる。

「わかったわかった 聞いてやるから ふたりとも落ち着けて！」

神楽は、ぱっと手を離し、ストンとソファに座った。

新八は服を整えながら、銀時に聞いた。

「銀さん 僕ずっと気になっていたんですが……銀さんって異常なまでの強さですよね」

「それがどうしたんだよ」

「いや 一体どこでそんなに強くなったのか とか その師はだれか とか……それに銀さんって攘夷戦争に参加してたんですよ？」

銀時はピクツと反応した。

「新ハイ……大人ってもんはなァ 過去をそう簡単に打ち明けたくねーもんなんだよ それをお前はよォ ほじほじほじ……鼻でもほじってろってんだよ」

「そこまで無理やり聞こうってわけじゃ……いや でも気になるじゃないですか！ 少しでも聞かせてもらえませんかね？」

「でもなァ……攘夷戦争つつたつてさ ノリの良い若いやつらが『あ なんかやってる よし行こう』ぐらいの気持ちで参加した戦争だったからな『そうだ京都市行こう』みたいな オレはノリが悪かったからよォ いかねーつもりだったんだが……「え？ 坂田行かねーの？ 攘夷行かねーの？ うわっ KYじゃん！」とか言うやつらがいたもんだからよ……ったくよォ 「え？ お前 打ち上げ行かないの？」みたいな感覚でいうなっつの！」

銀時は適当に解釈を始めた。

「でも 攘夷戦争に参加して生き残ったってことは 実力は当時から相当あったんですよね？」

「オレだけじゃねえって 桂だって辰馬だって高杉だって他の奴らも みんな強かったさ まァ オレほどじゃねーけどな」

「アンタ 自分の力過信しすぎじゃないですか？」

「だが……天人に殺されたやつもたくさんいる……仲間をかばって死んだやつもいる……攘夷戦争ってのは……そんなもんなんだよ……結局ただの殺し合いだ 現にあんなこととしてこの世界は なにも変わっちゃいねえしな……」

そう言った銀時の顔は、すこし暗かった。

「銀さん……少しだけ話してもらえませんか？」

「……………」

銀時は、その永い間、閉ざし続けた口をゆっくり、少しずつ開け始めた。

「松陽だ……」
しょうやう

「え？」

銀時の口調は重かった。

その昔…攘夷戦争時代と言われた時代があった。

江戸時代末期。

「天人」^{あまんと}と呼ばれる異星人達が地球に襲来した。

狙われたのは、日本……江戸。

侍の国だ。

まもなく地球人と天人との間に二十年にも及ぶ戦争が勃発。

これが攘夷戦争である。

数多くの侍、攘夷志士が天人との戦いに参加した。

この中に、銀時もいた。

しかし天人の絶大な力を見て弱腰になっていた幕府は天人の侵略をあっさりと受け入れ条約を締結。

廃刀令により刀を失った侍は衰退の一途を辿る。

世の中に天人がのさばり、幕府は天人による傀儡^{かいらい}政権となった。

しかし、幾多の武士はあきらめてなく、今でも攘夷を続ける。

その代表的人物は、銀時の戦友、桂^{かつら} 小太郎^{こたろう}である。

今では、『狂乱の貴公子』と呼ばれ、真選組に追われる日々が続いている。

彼は、攘夷志士たちの信頼がもつとも厚く、頼りになる存在である。

他に、高杉たかすぎ 晋助しんすけ、坂本さかもと 辰馬たつま。

彼らもまた、銀時や桂と共に攘夷戦争を生き抜いた仲間である。

銀時の仲間は、不思議と人を寄せ付ける、何かを持っている。

人望が厚く、そして強い。

そんな彼らの育ての親と言える人物がいる。

吉田よしだ 松陽しょうよう。

私塾である、『松陽私塾』の先生。

少年時代の銀時・桂・高杉らの恩師。

故人。

思想家で武士道を銀時たちに植え付けたのは、おおよさこの人だろ

う。

銀時たちを始め、様々な武士を生み出した。

桂や高杉は当時の教本をまだ持っているが、銀時はラーメンをこぼして捨てたと言っている。

「松陽は……オレたちの柱だった……」

銀時は下唇をかみ締める。

「だが、この世界はあの人を殺した！　　ん？あれ？これどっかで誰かが言ったな……まいっか」

そう言ったが、銀時の表情は依然、暗さを増すだけだった。

新八は何も言うこともなく、ただじつと銀時の様子を見ていた。

松陽先生は……。

銀時たちが最も尊敬し、信頼を寄せる松陽先生は、過激思想家として、幕府によって殺されたのだ……。

エロ本は母親にだけは見つかるな 布団の下にでも隠しとけ

その昔——松陽私塾。

この塾に、銀時、桂、高杉は通っていた。

恩師、吉田 松陽が主に武士道の教えを説く。

「————。」

銀時は庭側、一番奥の席で松陽の話を聞いているのか聞いていないのか、不真面目きわまりなかった。

しかし、松陽は銀時の何もかも知るかのように、ふと銀時を見て、一瞬だが微笑む。

銀時はそんな松陽を見て、すぐに寝た振りをする。

精一杯の照れ隠し。

松陽はまた話を始める。

「……………へッ」

銀時は軽く微笑んだ。

数年後――。

体を壊し、もう立つことさえまもなくなくなってしまった松陽先生は、自宅である私塾の自分の部屋で寝ていた。

妻を亡くし、両親さえ早くに亡くした松陽先生は一人でいた。

しかし、未だに教えを説く。

寝込んでいる状態で、かろうじて体を動かし、自分で書いた教本を持ち、途切れ途切れ読む。

生徒はかなり減ったが、銀時は極稀に、桂や高杉は、毎日のように来ていた。

高杉に至っては、毎晩松陽先生の側に付き、松陽先生が寝るまで居た。

一番長く松陽先生の側に居て、一番松陽先生を慕っていたのは、高杉だった。

しかし、実のところ、一番長く松陽先生と一緒に居たのは高杉ではなく、銀時だった。

高杉の気配がなくなった後、松陽は口を開いた。

「ぎ……んとき……いったぞ」

銀時は、天井からひよこつと顔を出した。

身軽に天井から飛び降り、床に着地した。

「高杉アイツも物好きだなア」

「ふふ……お前……と違って……良い子じゃないか……」

またもや松陽先生は微笑む。

銀時はその顔を暗い顔のまま見ていた。

「まア 無理すんなよ 俺アもう部屋に戻るぜ 親父」

「ああ……おやすみ」

銀時は背中越しに軽く手を上げて部屋を去った。

朝――。

今日は、珍しく朝から銀時が来ていた。

他には、桂、高杉が来ている。

偶然にも、他の生徒は、皆来ておらず、来ていたのは、この3人だけだった。

偶然と偶然が重なり合った。

しかし、松陽先生はこうなるのが分かっていたかのように、微笑みながら、敷布団の下から本を3冊取り出した。

「お？エロ本？」

そう言う銀時に桂が一喝した。

「いってえな！冗談だよ！冗談！」

「お前の冗談はいつも度が過ぎる」

松陽は、3人に本を渡した。

その本は、普段松陽先生が教えを説く際に、みんなに持たせていた本だった。

外装、内容は変わらないもの、少し新しい。

それぞれ、本の見開きには、『坂田 銀時』『桂 小太郎』『高杉 晋助』と書かれてあり、その下にはメッセージが書いてあった。

それぞれのメッセージの最後には、『銀時、桂、高杉、お前ら3人は世界を変えられる力がある。』と書かれていた。

その文字は、かろうじて読める……毎晩、体の不自由な松陽先生が、必死になり書いたものだった。

その一文字一文字は、重く、松陽先生の感情が文字を通して伝わってくる。

松陽先生は、本を渡した後、いつも通り、教えを説く。

夜――。

高杉は、いつも通り松陽先生の側に居た。

高杉は、松陽先生に話しかけた。

「先生……俺……絶対この世界を変えて見せます」

松陽先生は、ただ微笑むだけだった。

「あなたの息子のバカはともかく 桂は俺に協力してくれるだろうし……絶対……絶対あなたが望むような世界にして見せます」

そう言って、高杉は部屋を出て行った。

高杉が去った後、銀時は天井の壁にもたれかけながら言った。

「おい……どう言うことだよ……」

「何がだ……」

「さっきの本に書いてあったことに決まってるだろ……！」

「……………」

松陽先生は口を開こうとしない。

銀時は天井から飛び降りて、松陽先生に歩み寄った。

「俺の名前が吉田じゃなく坂田だった事と！……俺があんたの本当の息子じゃないって事だ！」

銀時の顔は、怒りに満ちていた。

「それに……書いてある……通りだ」

銀時は松陽先生の胸倉をつかみ上げた。

「ふざけんな！俺は……捨て子だったってのか……！」

「捨て子……ではない……お前の親……は……殿様に仕える……立派な……武士……だった……」

「じゃあ……なんで俺は……！」

銀時は、手を放した。

松陽先生は、話を続ける。

「……ヤツは…最強の侍…だった…名は……」坂田さかた 金時きんとき “…金時は殿様…に仕えるように……なつてからの名だ……元の名は…金太郎きんたろう……」

松陽先生は、ゴホゴホと咳き込む。

「そんなことはどうでもいい！！なんで俺は捨てられたんだ！」

「違う…理由がある…お前の…父親は……お前が3歳になる前に……天人によって……殺された……殿様をかばってな…」

「！！」

「その妻…お前の…母親も……話を聞いて……抜け殻のように……なつてしまった……今はもう……ゴホッ！」

しばらく松陽先生は、咳き込み続けた。

「……俺は…捨てられたんじゃないくて……独りになった……」

「金時と…親しかった私は……お前を……引き取った…」

「……………」

銀時は無言で部屋を去った。

「……………すまない…」

朝——。

銀時と桂は、玄関で鉢合わせになり、二人で松陽先生の部屋に行くことにした。

以前、銀時の心のモヤモヤは晴れない。

「銀時：松陽先生にちゃんと朝飯は食べさせてやっているか？」

「毎日俺が用意している」

「な どうだ 松陽先生……親父さんは……元気になってきてるか？」

銀時は返事をしなかった。

「……ふう……」

桂は、とりあえず話しかけるのは止めた。

二人は松陽先生の部屋に着いた。

「おはようございます」

桂が挨拶をすると、松陽先生は微笑む。

まあ、いつも通りのことだ。

こっちこっちと、松陽先生は手招きする。

二人は、松陽先生の近くに座った。

そして、松陽先生は話し始めた。

「銀時…桂…高杉は…いないのか…」

松陽先生は、一息ついてから、また話し始める。

「銀時…桂…お前たちは…世界を変える力を持っている…お前たちは…自由に生きろ…自由に…世界を変えろ…お前達の未来には…間違いはない…」

桂は黙って、聞いていた。

銀時は目は合わせなかった。

松陽先生は、微笑む。

——この微笑みも、今日限りになるとは、まだ銀時たちは知らなかった。

人生というのは うまくはいかないもの

「銀時…桂…少し…授業をする前…に…少し…話を聞いてくれないか…」

桂は、両手を畳につけ、はい、と答えた。

松陽先生は、真剣な顔をして、スツと息を吸った。

話が終わると、銀時は涙を流す。

話の始めから終わりまで、銀時はずっと俯いていた。

「……………親父……………!!」

その様子を、桂は見つめていた。

松陽先生は、銀時の頭に手をポンツと乗せ、なでてやった。

しかし、その時だった。

ガララ！

と、勢いよく戸が開いた。

「御用改めである！ここに過激思想家 吉田 松陽が居ると情報が
入った！おとなしくお縄につけ！」

幕府直属の警察だった。

銀時は、涙をぬぐい刀を持ち、すぐに立ち上がった。

桂が立ち上がるのも、ほぼ同時だった。

「何だお前！何しに来た！」

銀時が刀を鞘から抜く。

「むっ！」

警察も腰の刀を抜いた。

そこに、松陽先生の口が割り入った。

「待て…銀時………」

銀時は、刀を一旦鞘に収めた。

「私が…吉田松…陽ですが」

警察も、刀を収める。

「貴様が吉田松陽か 私は幕府警察の者だ 過激思想家である貴様を捕らえに来た」

警察は、松陽先生のからだを引っ張り上げる。

「むう……お前……体が不自由なのか」

そこに桂が立ちふさがった。

「ちょっと待ってくれ！何故松陽先生を連れて行くんだ！」

「門下生か……いいか コイツは幕府に逆らい そして過激な思想を心の幼い子ども達に言い聞かせ 洗脳しようとした！危険人物なんだ！」

「そんな……松陽先生は幕府なんか逆らっていない！危険人物なんかじゃない！」

そこに松陽先生が口を挟んだ。

「もう……いい……桂……全て事実……だ」

「先生……！しかし……！」

警察は、必死な桂や銀時を見て、少し哀れみを感じた。

「幕府の命令だ……仕方あるまい」

そう言って、部屋を出て行こうとした。

が、銀時が警察に言った。

「じゃあ……親父は…どうなんだよ…」

その質問に、警察は少し間を開けていった。

「……息子か……気の毒だが…確実に明日までに打ち首だろう」

「!!」

「え……？」

そう言って警察は、松陽を連れて、出て行った。

しかし、銀時は諦めず必死に喰らいつく。

「待て!待ってくれ!もう少し…もう少しだけ待ってくれ!親父はもう長くねーんだよ!何でだよ!何でなんだよ!」

警察は、何度もしがみついてくる銀時を、何度も振り払う。

「なあ!止めてくれ!なあ!その人を連れて行かないでくれよ!俺たちにはそいつが必要なんだよオオ!!」

警察は、銀時に向かって、言い放った。

「いいかげんにしろ!こっちだって幕府に反対なんだ!だが従わなければ俺の首が飛ぶ!俺はな 幕府からは過激思想が植えつけられ手遅れになってしまった子どもは斬り捨てろと言われているんだ

！これ以上…追えば斬り捨てるぞ！」

そう言った警察の目は、赤かった。

警察は、松陽を馬車に寄せ、走っていった。

銀時は、地に手をつけ叫んだ。

「親父を……松陽先生を…返せエエエエエエ！！」

銀時の声は、遠くまで響き渡った。

車の中で、松陽は微笑んでいた。

頬を伝う雫をぬぐいながら。

二人残された銀時と桂は、ただ呆然としているだけだった。

翌日、予定通り、松陽先生は打ち首にされた。

前日の晩に銀時が高杉に話をすれば、高杉は銀時を殴り飛ばし、胸倉をつかみあげる。

「お前は心身ともに腐ってるのか!? 何故……死ぬ気で止めなかった……!!」

銀時は黙っていた。

「……俺はお前を仲間だと思っていた……だが そんな生温いことを考えていたのは俺だけだったようだな……」

高杉は銀時を突き飛ばし、去った。

もう3人は、バラバラになりかけていた。

しかし、松陽先生が打ち首にされたその日に、銀時は決断をした。

翌日の夜、銀時は高杉、桂を呼び出した。

「銀時……期待はずれな事を言ったら殺すぞ」

高杉は殺気立っていた。

「高杉…桂……」

一瞬、銀時の眼が輝く。

「攘夷戦争に参加するぞ」

当然の様に、二人はうなずいた。

「当たり前だろう 3人で世界を変えてやろうじゃないか」

「銀時ィ…わかってんじゃねーか…」

「俺だけでも十分だ」

銀時の眼はもういつも通り、やる気のない、魚の死んだような目に

変わっていた。

三人の道は、再び重なりかけ、共に歩み始めていた。

松陽先生の想いを受け継いだ者たちは、ついに動き出す。

『坂田 銀時』

銀時…私は始めに、お前に謝らなければならないことがある。

それは…私がお前にこの十余年間嘘をついていた事だ。

私は…銀時の本当の生みの親 父親ではない。

今まで嘘をついて、本当にすまなかった。

だが、私はお前の仮の父親になれたことを、育ての親になれたことを、誇りに思っている。

お前はいつも人の話を聞く態度は取れていなかったね。
だが、私は知っているんだよ。

お前が、一番私の教えを理解してくれている。
寝てる振りをしても、ちゃんと話は聞いてくれている。

つい怠けてしまうところもあるが、それがお前の良いところだ。

自由に生きてくれ。目一杯伸びをしてみろ。

きっとお前にしか見えない未来があるはずだ……。

最期に。

『銀時、桂、高杉、お前ら3人は世界を変えられる力がある。』
私はそう信じている。

『桂 小太郎』

桂……私の私塾の最初の生徒は君だったね。

私は、本当に嬉しく思ったんだよ。

君は本当に真面目で、素直な、賢い良い子だったね。

私の淡々とした授業も、唯一最初から最後までついて来てくれたね。

私は、君のような生徒を持てたことを、誇りに思う。

その真面目さを生かして、今後世界を変えて行って欲しい。

その素直さを生かして、すばらしい人間になって欲しい。

優しく、賢く、そして体も心も強い子よ。

私は期待しているよ。

最期まで君らしい生き方をしなさい。

自分が後悔しないような人生を送りなさい。

私はそれを一番望んでいるよ。

自分の人生に積極的になりなさい。

きつとだよ……桂。

最期に。

『銀時、桂、高杉、お前ら3人は世界を変えられる力がある。』
私はそう信じている。

『高杉 晋助』

高杉。

お前は、おんこうとくじつ温厚篤実な性格だが、その魂の中は、しゃんとしていて、そして威風堂々としている子だ。

私はお前を見ていて、日に日に強くなっていくのを感じたよ。

それは自分が一番良く知っているね。

その強さを駆使して、縦横無尽に世界を変えてみても良し。

その冷静さを駆使して、しんぼうえんりょ深謀遠慮し世界を変えるも良し。

私は期待しているよ。

お前の生き方は、堂々として、それでいて充実していて、とてもよかった。

これからも、自分の新しい生き方を見ていくといい。

この数年間、毎晩のように私の看病してくれてありがとう。

私は本当に嬉しかった。

優しい子よ。

何よりも強い心を持った子よ。

その力で、未来を斬り開いてくれ。

最期に。

『銀時、桂、高杉、お前ら3人は世界を変えられる力がある。』
私はそう信じている。

「信じているよ………」

侍なら戦争から絶対生きて帰って来い

「銀さんの師匠って……銀さんの父上だったんですか？」

「まア……義父って感じだな」

「ヅラも銀ちゃんのパピイにしごいてもらったアルか」

「というか 銀さんの父上って話からするとすごくないですか!？
3人が生き残ることを予想して 3人に本を渡して 本当に3人
とも生きてるんですから!」

「新ハイゝ 銀さん 今グッサグサ来てるんですけど お前も大人
になればわかる 自分の過去をしつこく探るヤツを見ると 殺意
が沸いてくる」

「新八 しばらく黙ってろヨ」

「あ す…スイマセン」

「あー 興ざめだわ やっぱもう話すのヤメるわ」

「あっ ちょ 銀さん! すいませんって! ごめんなさい! もう勝手に
話さないんで! お願いします! 続きを聞かせてください!」

「えー だって銀さん傷ついたんだもん」

「だもーんて……銀さん あの……」

「ジャンプ」

「へ？」

「あとでジャンプ買ってこいや パシリの新八」

「あ…はい！ それで聞かせてくれるんですね？」

「あー あと イチゴ牛乳ね 新パシ」

「新パシって なんで…」

新八は、フツフツと沸く怒りを抑えて、銀時の話の続きを聞こうとしている。

銀時は、ハッと息を吐く。

「まア 俺たちはそんな感じで攘夷戦争に参加したんだよ」

「それで？ どうしたんですか？」

新八は、興奮を抑えきれない様子だった。

銀時は嫌気が差した。

「……じゃ あとは回想にまとめるから」

「回想って！？」

「散歩してくるわ」

そう言って、銀時は万事屋を出て行った。

残された新八と神楽。

新八が神楽のほうを見ると、神楽は新八に向かって、

「ペッ！」

そして、自室に戻っていった。

「……………なんで？」

「今日から 異星人 天人を一掃するため 攘夷に参加させていただきます 桂です」

「おなじく 高杉だ……」

「坂田 銀時でゝす やるきは十分でゝす おねがいしまゝす 趣味は糖分摂取でゝす がんばりまゝす」

銀時だけが拍子抜け。

最初から攘夷の先輩たちからは、銀時に対してだけ舌打ちが聞こえる。

舌打ちと「消えろ 白髪」みたいな言葉が行き交う中、ある男の聲がその場を沈める。

「アッハッハッハッハ！ 坂田 銀時か！ ワシは気に入ったぞ！」

高らかに笑うその男は、モジャモジャ頭の船好き、坂本^{さかもと} 辰馬^{たつま}だった。

坂本を見て、攘夷の先輩の人が言った。

「坂本…… そうだお前 こいつら新入りに具体的な攘夷を教えてやれ」

「アッハッハ！ 無理じゃのゝ」

「無理じゃのゝ じゃねえ！ しっかりソイツらに叩き込んでおけ

よ！」

「ワシもまだ攘夷参加してすぐということを山さんは忘れたがか？」

「山さんじゃねえ！ テメーこそ人の名前をすぐに忘れるな！」

そう言い残して、男たちは去っていった。

取り残された4人には、寂しさだけが残った。

そこで口を割ったのは、高杉だった。

「とりあえず 話を聞かせてもらおう 坂本とやら……」

「つーか アンタいくつよ？ 年上？」

銀時と高杉は、他人を敬うという気配を微塵も感じさせなかった。

「アッハッハ！ タメでいいぜよ！ 気軽に話してきていいんじゃない！ ここでは上下も関係ないんじゃない！ 攘夷では強いものが偉いという法則じゃ〜」

「あ マジでか？ じゃあ おい そのモジャモジャ頭 俺の代わりにパシってくんね？ 俺 イチゴ牛乳とジャムパン」

銀時は軽々しく話しかける。

「アッハッハ！ ぶっ殺すぞ」

高杉がククツと笑う。

「強いものが偉い……か まさに俺の望む世界がここにあるんだな」

その間、桂はただ目をつぶっていた。

攘夷は毎日のように行われる。

しかし地域によって、その凄まじさは変わってくる。

銀時が加入した攘夷の地域は、他と比べ物にならないぐらいの凄まじさ、そして休める時間が比較的に少ない地域だった。

銀時たちは、あえてそこを選んだ。

というよりは、銀時の「近いほうが良くね？」の一言で決まったのだが……。

銀時・桂・高杉が攘夷に参加した次の日であった。

早朝……天人軍による、大規模一揆。

この後一週間と続く、天人300万人VS全国の侍の、忘れられない大戦争。

この天人軍による一揆は、後に『攘夷運動』から『攘夷戦争』と名づけられるきっかけになったものである。

そして、あの銀時が白夜叉と恐れられる事になった戦争である。

「天人が襲ってきた」

ある侍がそう叫んだ。

「打倒天人！行くぞ！同志たちよ！」

『オオオオオオオオオオオオオオ！！』

ある男がそう言うと、そこに居合わせた500の侍が一斉に雄叫びを上げる。

松陽の意志を引き継いだあの三人以外の全員は。

空は、鉛のように重い曇天だった。

攘夷戦争が開戦した。

昔話はほとんど嘘だから 話半分に聞け

銀時、桂、高杉、坂本は、攘夷の先輩たちの班の後に続き走っていた。

銀時たちの班は、グループ銀時、桂、高杉、坂本から成る、フォーマンセル四人一組班だった。

丘を登りきったところで前の班が急に足を止めると、銀時たちは横に並ぶ。

その先に見えたのは悲惨な状況だった。

300万の天人が、こちらに向かっている。

先に行った侍たちは、次々と薙なぎ倒され、殺されていく。

情報を受け、先に来た日本中の侍の闘志むなしく、敗れていく。

「これは……」

「なんてこった……!! ヤツら天人は一体何人いるんだ……!!」

さすがに、300万の天人を目の当たりにして、多くの侍が勝ち目はないと思った。

しかしその時、銀時は腰の刀を抜き一歩前に出た。

「お…おい坂田!」

一瞬、銀時たちに向かって風が吹く。

銀時は刀を抜いた仁王立ちのまま、話し出した。

「……みなさん 何を怖気付いてるか知らねーが わかってんだろ？
今俺たちが闘わなきゃ何も変えることができないんだぜ……
今ココにいるヤツはみんな死を覚悟して 自分の意思で戦いに来てるんだろ？
今 俺たちは戦場にいるんだ……何かを護るためにな……
まさかみなさん……ここに来て 死ぬのが怖いとか？」

「……………」

「ちげーよな 俺たちは死ぬのは怖くねえハズだ 俺たちが一番
怖^{おそ}れているのは 天人の言いなりになり 自分^{テメー}の命しか護れねーよ
うな……幕府のヤツらみたいになっちまうことだろ？ 俺たちで幕
府のヤツらに喝を入れてやろーじゃねえの なあ みんな……なゝあ
ゝ……！」

銀時が顔だけ振り向くと、先輩たちは銀時を蹴り飛ばす。

「新入りが知ったかぶるんじゃないやねえ……んなことわかりきってんだ
よ」

「……………じゃあ 蹴るなよ 山さん」

「山さんじゃねエエエエ！ お前まで俺を愚弄するかアアアア！！」

山さんが怒っているところに、桂が仲介に入る。

「まあまあ 今はそんなこと気にしてる場合じゃないでしょ 山さん！ 落ち着いてください！」

「お前まで……！ ……ぐっ……とにかくだ！」

山さんは、みんなの前に立った。

「みんな 前に進むぞ！ いいか 一つにまとまらず 広角から攻めるんだ！」

『オオ！！』

仲間たちの声が返ってくると、山さんは、うん。と一度うなずき、前に向きなおした。

「行くぞ！ 同志たちよ！」

山さんが走り出すと、同時に他の仲間も走り出した。

『オオオオオ！！』

その場にいた侍は、拡散しながら一斉に丘を駆け下りた。

あの四人以外は。

銀時が後ろの三人に向かって話しかける。

「お前ら……いいか 絶対エ死ぬんじゃねーぞ」

銀時の言葉に、当たり前のように桂は言い返す。

「そんなことは百も承知だ 銀時」

高杉は、銀時の背中に語りかける。

「俺たちは何をしに来たんだと思ってんだ？ 革命でもなんでもねエ…… このバカみてーになっちまった世界に 松陽先生の事を認めさせるためだ この世界に松陽先生を認めさせるまで死ぬわけにはいかねエよ」

三人の会話を聞いていた坂本は、茶化す様子も、笑う様子もなく、いたってまじめに言う。

「おんしやらが何を想い攘夷に来たのかはしらんがの 夢や過去話は夜に語るもんじゃな ここは戦場じゃき 私語は慎むべきじゃな 一瞬で足をすくわれるきの その辺わかったら いくぜよ！」

坂本は四人の先陣をきって、走り出した。

しかし、走り出した第一歩目だった。

【ガッ】

石につまずく。

「あゝああああああ！！！」

坂本はゴロゴロと転がっていく。

「早速テメーが足元すくわれてんじゃねーか！」

「俺たちも行くぞ！銀時！高杉！」

「おう」

「ちょ 待て！俺を置いてく……【ガッ】 あゝあああああああ
あ」

銀時は、ただ一人河川敷の草丘で仰向けに寝転がり、平和な青空をボーッと眺めていた。

ただ、どんな悩みでも何でも吸い込んでくれるような空に想いを馳せながら。

死んだ魚のような目で……暗い表情で……一体何を考えているのか……。

そんな銀時に、一人の男が立ち止まり声をかけた。

「坂田……坂田銀時か!？」

「…………あ あんたは……や 山さん!？」

「山さんじゃねエって言ってんだろ……まアいいか 久しぶりだな! 元気になっていたか!？」

「ああ まア 山さんも元気そうで……」

「坂本は銀河を股に掛ける星間貿易業『快援隊』のオーナーで桂や高杉は相変わらず攘夷か で お前はプーか? ははは」

「高杉に至っては次ぎ会ったら殺す気だけだな」

「高杉のヤツ 『春雨』と手を組んだらしいな」

「ああ……」

「あのころは 天人と手を結ぶなんて微塵も感じさせなかったのになア 人間ってのはわからんもんだな」

「山さんこそ もう攘夷はいいのかよ あれほど天人を憎んでいた

のに」

「…………確かに 俺は天人によって 両親や妻 そして大切な仲間も殺された……」

そう言う山さんの顔には、哀しさが見える。

銀時はその顔をじっと見つめる。

「だが ただ反抗していても みんなは戻ってこない 未来は変わらない……坂本やお前みたいに利口に生きることが一番だ もちろん 天人の言いなりになるのは御免だがな……」

「山さん アンタ変わったなア」

「なに？」

銀時は立ち上がり、尻をはたき、歩き出した。

「俺や坂本のように利口に生きるだア？ バカ言うんじゃないよ 俺も坂本^{ヤッ}も利口に生きてるように思えるかも知れねーが 俺たちもちゃんと魂^{こゝろ}に獣飼ってんだよ」

銀時はゆっくり振り返る。

「……今はまだ 眠らせているけどな」

山さんは振り返る銀時の眼を見て、身震いをした。

「（今の眼…… “白夜叉”の眼……アイツ……何を考えて……）」

銀時は急に立ち止まった。

「ああ そうだ山さんよ！」

そういう銀時の顔は、少しばかり晴れやかに見えた。

「お……おう」

「これから一杯やらねーかい？ 俺もあんたと会って少し気持ちが整理できた 昔のことを話してみたくなったよ」

「……おお そうだな 行くか！」

西の空には、茜色の空が広がり始めていた。

自身と不安は紙一重（前書き）

金曜日・土曜日は、お休みします。

ご迷惑おかけします m (|) m

自身と不安は紙一重

荒れ狂う戦場で、銀時たちのチームリーダー、坂本は三人に指令を出す。

「桂、銀時！お前らはそっちに行けィ！ワシと高杉はこっちを担当するぜよ！」

「おう！辰馬 高杉！頼んだぞ！」

そう言って、四人はいったん別れた。

激しい戦いが繰り広げられるこの戦場で、四人一組でも全滅は当たり前だった。

そんな中で、二人一組はほぼ自殺行為に近かった。

四人が別れてさっそく、銀時と桂、坂本と高杉は天人に囲まれる。

ある天人が、銀時と桂に指をさして言う。

「ぐひひ……お前ら俺たちに逆らって何が楽しいんだ？うひひ！」

「テメーら地球人は俺たちに従えばいいんだよお！」

天人の言葉に、銀時と桂は眉一つ動かさず、冷静でいた。

ある天人が、手を上げる。

「やっちまえ！」

その一言で、天人たちが一気に襲ってくる。

「弱エヤツは死ね！ 死ね死ね死ねエエエ！！」

桂と銀時は、背中合わせに合図をとる。

二人は、同時に刀を抜く。

一瞬だった。

「ぐぎゃああああ！！」

銀時と桂は、一瞬にして数十人の天人を斬り殺した。

坂本と高杉も同様に、天人を斬り殺していく。

しかし天人の中には、動きの良い天人もいた。

「銀時ィ！！後ろ！！」

一際大きな天人が、大鎌を振り下ろす。

「!!!」

かろうじて銀時は攻撃を避け、その天人を斬り殺した。

「気をつけろ銀時!」

「わかってらァ!!」

銀時たちが斬り殺したと思った天人は、また立ち上がり襲ってくる、天人たちの戦闘能力は侍など敵にならないほどだった。

それでも、侍は決してあきらめない。

己が信ずる道を通すために。

幕府の様にならないために。

己の魂だけは曲げないために。

侍魂は天人などに屈しなかった。

侍も、斬られ、殴られ、それでも心の臓が止まるその一瞬まで、打倒天人を忘れず、斬りかかった。

例えば腕がもがれようと、足を刈られようと、刀が持てる限り抵抗を続けた。

天人には、例えば殺したといえど、その執念には恐れを成しただろう。もったも、天人が一番恐れたのは、この後のあの四人の活躍だろう。

この酷い戦況の中で、銀時の頭によぎるのは、松陽先生のこと、そしてあの時の言葉である……。

「銀時…桂…少し…授業をする前…に…少し…話を聞いてくれないか……」

桂は、両手を畳につけ、はい、と答えた。

松陽先生は、真剣な顔をして、スッと息を吸った。

「二人とも……私との数年……どうだった？」

「!？」

思わず銀時と桂は顔を見合す。

「先生何を……？」

「私は……もう……そう長くは………ない………」

銀時と桂は、松陽先生の言うことを信じなかった。

「先生！」

「できれば……こんな人生の終わりを……迎えたくなかった……
……私が……体さえ壊さなければ………私の意志を……受け……継
いでくれる子が……もっと増えたの………にな」

「先生！ 弱気なことを言わないでください！ もし先生が本当に
そう思っていたとしても 俺たちが先生の意志をちゃんと受け継い
でます！ 心配しないで下さい 先生の意志は 必ずみんなにも届
きます！」

桂は、松陽先生を励ましていた。

「フ……ありがとう……桂」

松陽先生はゆっくり体を起こした。

「あ 先生無理をしないで………」

「大丈夫だ……それより……銀時」

松陽先生に呼ばれても、銀時はただ俯いたままだった。

それでも、松陽先生は、お構いなしだった。

「話がある……大事な話だ……」

桂は、気を遣って立ち上がろうとしたが、松陽先生は「大丈夫……座ってなさい」と手で制した。

桂は、落ち着いていた。

そのまま、方膝立ちから正座へと戻した。

松陽先生は、こちらを見ようとしないうちに銀時に向かって話し出した。

「今まで……私がお前の……父親だと……偽っていたことを……ここで直接謝るよ……」

桂は松陽先生のその言葉に驚いた。

しかし、声には出さなかった。

「今まで黙って……いたのは 理由がある……言い訳として……聞いてくれても良い……」

銀時は、いつの間にか拳を握っていた。

「お前がもし……まだ小さいときにこの話を……したら……お前に信じてもらえなかった……だろう……できれば……隠し通したかった……私が死ぬまでな……だが私はもう長くない……」

松陽先生の言葉に、桂は反論を止めなかった。

「先生!!」

しかし、松陽先生は桂に顔を向けると、「桂……少しだけ」と言つて、口元に指を当てた。

「銀時………私は……お前の……自慢の父親になれたかな？」

その言葉に銀時はピクツと反応する。

「私は……お前の父親からお前をあずかった時……とても不安だった……」

十数年前……松陽先生の家

「なんだって！？ もう一度言ってみろ金太郎！」

「金太郎じゃねェ 今は金時だ バカ コイツをあずかってくれ
と言ったんだよ」

そこには、まだ幼いが、腐った眼の銀時がいた。

「何をバカな……！！ まだこの子は生まれたばかりじゃないか！
」

「……松陽……俺アなア……お前を信用してるから コイツをお前
にあずっ……！」

松陽は金時の胸倉を持ち上げる。

「信用してるからだ！？ 信用しているからと言って 自分の愛
人に死の痛みまでさせて産ませた赤子を 他人にあずけるか！？」

金時は、しばらく黙りこんだ。

「松陽……俺な……実は……あのバカ殿の側近そっきんに任命されたんだよ

…」

松陽は驚き喜んだ。

「え 本当か！？ 良かったじゃないか！」

金時は、松陽の手から開放されて、すこし黙っていた。

そして、顔を上げて言った。

「だから……俺も妻も……城に住まなきゃいけないんだよ……だから……子供は……」

「……………」

松陽はしばらく、唇をかみ締め、拳を握り考えていた。

そして、口を開いた。

「本当に……俺に任せて良いかももう一度考えてくれ 俺はその子を立派に育てられるか自信がない」

「お前以外に誰がいる？ 信頼してる お前がこの子を立派に育ててくれると信じている」

「……金時よ……たまにはこの子の成長を見に来いよ もちろん奥さんと一緒に……そのときは良いもてなしをするよ」

「すまないな……松陽…… さア 銀時……！？」

幼い銀時は、よちよち歩きで松陽の膝元に向かっていた。

「な……」

銀時は、松陽の膝にボスツと座った。

同時に二人には笑いがこみ上げてきた。

「ふっ………ハハハ」

「あーっはっはっはっは!!」

その約2年後……金時は、天人が開国を迫り城に放った、NAS砲（ネオアームストロング砲）によって………いや、天人によって殺された。

側近だった金時は必死に將軍を安全なところに避難させ、砲撃を受けてしまった。

結果、金時は將軍をかばって死んでしまった。

「あの時……お前が私の元に……必死に歩いてくるのを見て……私は安心したんだよ……！」

銀時は、くっと言葉を漏らす。

「お前の父親が死んだと報が入った聞き 私が落胆していた時……お前は一人で立ち 私の元に歩いてきたんだ……！」

「親父……」

「あの時私は……どれだけ勇気をもらったことか……！　こんな赤子が　自分の未来に向かって歩き出したのだから……！」

「親父……！」

「私は……こんなにお前を立派に育てられた……！ 自分を犠牲にしても誰かを護ることができる……人の悲しみを共にすることのできる……大切な我が子だ！」

「……………」

「銀時……………今まで私は お前の親父でいれたことに……………感謝しているよ」

「……………親父………！！」

銀時は話が終わったと同時に涙を流した。

その様子を、桂は見つめていた。

松陽先生は、銀時の頭に手をポンツと乗せ、なでてやった。

松陽先生の言葉は、はっきりと銀時の心に焼きついた。

自身と不安は紙一重（後書き）

次話、日曜日を楽しみにしててください！

酔うまで飲んで 吐くまで飲むな（前書き）

休み明けの投稿です！

お騒がせしました！m
（
）m

酔うまで飲んで 吐くまで飲むな

銀時と山さんは、屋台に入り、昔話をしていた。

互いに酒を飲みながら、深夜になるまで話し込んでいた。

屋台の親父も、もう帰ってくれた的なオーラを身に纏い始めた。

ちょうど今は、坂本の話で盛り上がっていた。

「ぶあっはっはっはっは！ そうだったそうだった！ 坂本が転が
ってくるのを見て 俺たちも目が点じゃったわ！」

「昔っから 緊張感が微塵もねーヤツだったなァ アイツはよォ！
しかも強いんだか弱いんだか よくわからねー闘い方するヤツだ
ったしよ〜」

完全に酔いだした二人は、テンションは最高潮だった。

「そういえば 今思い出せば お前ら4人だけメチャクチャな強さ
だったよなァ 俺たちも驚いたぜ 自分たちより遥かに若いお前た
ちが 俺たちより遥かに強かったんだからなァ」

銀時はふと昔のことを思い出し、口に出した。

「正確に一撃で仕留めようとする 狂乱の貴公子ヅラ 何でも壊し
たがる 粗い闘い方をする高杉に 軽い動きで無駄なく相手を仕留
める辰馬……」

「そして 凄まじい強さで敵・味方 両方に恐れられた 白夜叉
坂田銀時……か」

銀時は大根を一口食べ、クイツと酒を飲み干す。

銀時の眼は悲しげな感じだった。

山さんも、ちびちびと酒を飲むだけだった。

銀時はコップのそこを見ながら、話し出した。

「山さん……俺 本当は攘夷に参加したこと……後悔してんだ……」

山さんはハッと銀時のほうに振り向く。

「なに……?」

銀時は、「親父 もう一杯」と言って、酒のおかわりを頼むと、今度は自分の箸を両手で握って話し出した。

「俺たち……俺と桂と高杉は……幕府に……天人のために殺された恩師の敵討ちのために 攘夷に参加したんだ……」

「ほう……」

親父は、銀時の目の前に並々に酒を入れたコップを置いた。

「はいよ 兄さん^{あん}」

「あ どうも」

銀時は、その酒を半分だけ呑んだ。

そして片方の肘をついて、オデコに手を当て、考え込むような形で話を再開した。

「今では馬鹿なことをしてたなって思ってた……そんなことをしたって 俺たちの先生は帰って来るわけでも 喜んでくれるわけでもないのによ……」

山さんもコップの中の酒を飲み干し、おかわりをした。

そのまま、黙っていた。

「……………」

銀時は皿の上に残っていた大根を食べ、箸をおいた。

「先生が俺たちに残した最後の言葉……」「世界を変える力を持っている」ってな……それを俺たちは真に受けて 焦って攘夷に参加して……何も変えられるわけがなかったのに……んなこと わかってたのによ……」

山さんは、銀時の方に目をやりながら言った。

「銀時……………」

銀時は、一気に残り半分の酒を飲み干した。

「あー 酒が入るとダメだな じゃ親父 金はここに置いとくから

山さん今日はありがとな　もう俺は帰るよ」

そう言って、銀時は暖簾のれんをくぐって出て行こうとした。

その時、コップの中で酒を回しながら、山さんが銀時を呼び止めた。

「銀時……」

銀時は、暖簾で隠れて、背中しか見えない山さんに振り返った。

「？」

「銀時　俺はお前らのしたことは無駄なんかじゃねーと思うぜ……
攘夷に参加したことによって　お前たちの内心は変わったはずだ
攘夷はお前たちが世界を変える一歩目だと思えばいいさ……　ま
ア　年寄りの考えだけだな」

それを聞いた銀時は、フツと笑っただけで、何も言わず去っていった。

山さんは、残りの酒を飲み干し、親父に言った。

「……………親父　もう一杯くれ　今日は気分が晴れ晴れしてる」

親父は、あきれた顔で言った。

「旦那　酔いつぶれても　アッシは知りませんよ」

対して山さんは、当然のような顔立ちだった。

「わかってるよ」

その時、親父の顔が少し晴れやかになる。

「そのかわり……」

親父は、足元から焼酎瓶を何本か取り出した。

「？」

それを、山さんの前にドンツと並べた。

「今日はドンだけ飲んでもタダですぜ 旦那が眠るまでアツシも付き合わせてもらいまさア」

山さんはフツと笑った。

「……親父 あんがとよ」

帰り道、銀時は心の中で思った。

「……………もうちょっと肩肘張らずに 伸びを試みるのもいいかな
……………」

深夜に入っても賑やかさが衰えることのないかぶき町を通って、銀時は万事屋まで歩いて帰った。

が、その帰り途中……。

「おぼろろろろろろ……!!
ろろろろ……!!」
うえっ
飲みすぎた……おぼろろ

吐くまで飲んでいたのであった。

闘うことが男の運命

銀時たちの攘夷戦争が始まって、3時間が経過していた。

銀時ら以外の侍は次々と殺され、ついには最初の500人から、20人ほどまでに減ってしまった。

最初から攘夷戦争に参加していた侍も1000万いたが、今現在この場所には、たったの数万人しかいなかった。

ほとんどが戦死。

あとは腰抜け侍だ。

対する天人たちは最初の300万人から、200万人。

3時間で100万人も減らすことができたのは、やはり銀時たちの活躍が大きいだろう。

もちろん、山さんや他の侍も傷を負いながらも天人に対抗していた。

しかし、3時間も全力で闘うと、やはり体力は極限までに擦り減ってしまう。

銀時と桂は、たくさんの天人に囲まれ、その中心で二人膝を付いていた。

ある天人が言った。

「お前らもここまでだア…………よくやったよ お前らはア…………だが 所詮は人間…………我ら天人に勝てるわけがなかったのだア…………あきらめて我らにその首を捧げるが利口だぞ」

桂は、もう諦めかけていた。

「…………これまでか…………敵の手にかかるより 最後は武士らしく 潔く腹を切ろう」

桂は覚悟はできていた。

しかし、銀時はそんなことを少しも考えていなかった。

「バカ言ってんじゃねーよ」

「……………」

「…………立て」

銀時は音もなく、スツと立ち上がった。

「美しく最後を飾りつける暇があるなら最後まで美しく生きようじゃねえか」

「……………」

桂は、そう言って振り向かない銀時の背中を見ていた。

その背中を見ていて、桂は少し悔やんだ。

「（そうだった……俺たちは死ぬためにここに来たわけじゃなかったんだ……この世界を変えに来たんだ……松陽先生のためにもこの世界を変えるまで俺たちは死ぬわけにはいかないのだ）」

桂も、立ち上がった。

「行くぜ　ヅラ」

「ヅラじゃない　桂だ」

天人が一気に襲い掛かってきた。

「かかれエエエエエ！！」

銀時と桂も互いに違う方向に斬りかかった。

『うおおおおお！！』

銀時と桂は、さっきまでとは違う、圧倒的な力で天人たちを斬り殺していく。

今度は一撃で仕留めていく。

しかも銀時だけは、神がかった動きを見せていた。

まさしく武神……白夜叉といってもおかしくないものだった。

そんな中、高杉、坂本も銀時と桂と合流するためにやって来た。

「銀時　イイ　桂　ア　無事か！？」

坂本と高杉が天人を斬り分けながら向かってくる。

「坂本！ それに高杉！ お前ら生きてたのか！？」

『殺すぞ！！』

銀時と桂と高杉と坂本は、四人背中合わせに中心に集まった。

「まさかここまで追いやられるとはな……ワシも予想もできんかったの」

辰馬は、半笑いしながら言った。

「んだよ 辰馬 随分と弱気だな」

「銀時……テメエけっこう深手負ってんじゃねーか」

「あ？ 高杉テメエ自分の体よく見てみる 傷だらけだぞ」

「テメエも傷だらけじゃねえか」

「いやいや お前にいたっては頭から血出てるぞ」

銀時と高杉の口喧嘩が勃発してしまった。

そこに桂が口だけだが、仲介に入る。

「銀時 高杉 今はそんなこと言ってる場合じゃないぞ」

銀時は、刀を構えたまま3人に言う。

「まア こうしてまた4人そろったんだ これも何かの縁……じゃねえな これもまた運命ってヤツか……」

高杉は銀時のほうに首だけ向けながら言った。

「次に四人そろって会うときは回りに天人は一匹もないことを願おう」

桂は高杉に言い返す。

「といっても天国は嫌だぞ」

銀時は少し笑いを含ませながら言った。

「桂 お前は地獄じゃねーか？」

「よし 次に合う時はお前を切り殺すことを誓おう」

高杉は、二人に言った。

「ゴチャゴチャうるせえな 天国も地獄も行く気はねえ 天寿を全うしてやるぜ」

坂本は三人に言った。

「この戦争が終わったら 四人で一杯やりたいもんじゃ」

4人はしばらく静まった。

その時、銀時が一息ついて言った。

「……じゃ 行きますか」

「うむ」

「行くぜよ!!」

『おおおおおお!!』

銀時、桂、高杉、坂本は全力で天人にぶつかりに行った。

しかし、この後悲劇が訪れる……。

「!? 銀時ィ!! 危ない 避けるオオオ!!」

桂の声が戦場に響く。

「!!」

【ドズッ……!!】

「ぐああああ!!」

闘うことが男の運命（後書き）

突然すみません。

学生と言う身分で、さらに受験生というわけで、毎日投稿が難しい状況になっています。

受験が終わるまで、不定期投稿が続いてしまいます。

ご了承ください。

本当にすみません。

戦場の夜叉は 鉛色の空に叫ぶ（前書き）

お久しぶりです！

やっと一話完成しました……………。

戦場の夜叉は 鉛色の空に叫ぶ

銀時は、ただひたすら天人を斬っていた。

下を見れば、仲間や天人の死体がごろごろ転がっている。

銀時の頭には、松陽先生への想い、共に国を憂い集った仲間への想いで溢れ、そして天人を殺していくことに嫌悪感さえもよぎっていた。

これ以上天人を殺しても、無意味だと悟ったから。

ただ仲間と天人が死んでいくだけの戦争に、自分から参加したことに後悔をしていた。

何も変えられない……。

こんなことをしても、何も変えることなどできるはずがない。

松陽先生との、あの日々はもう戻らない。

……こんなことをしても親父は喜ばない。

銀時が気を緩めて、刀を微かに下ろしてしまったその一瞬だった。

桂が叫んだ。

「!? 銀時イ!! 危ない 避けるオオオ!!」

桂の声が戦場に響く。

「!!」

銀時が振り向くと、天人は槍を持ち銀時に襲い掛かってきていた。

しかし、銀時は反応が遅かったため、回避に間に合いそうになかった。

「くそ……!!」

その時、銀時たちの目に映ったものは……。

【ドズッ……!!】

銀時をかばった高杉だった。

「た……高杉!？」

「ぐああああ!!」

銀時が声を掛けると、高杉は目を押さえて倒れていた。

天人の槍が高杉の左眼に刺さったのだ。

銀時は、すぐに高杉を刺した天人を斬り殺し、高杉を抱きかかえた。

と同時に、桂、坂本……他、山さんや数人の侍が銀時と高杉を囲んで、天人の侵入を一切拒んだ。

「高杉！オイ 高杉！！しっかりしろ！！」

すると、高杉は苦しそうに言った。

「テメエ……死ぬ気か……銀時ィ」

銀時は左眼から手を離れた高杉を見て、驚愕した。

「お前……目が……！！」

高杉の左眼は完全に陥没していて、そこからは大量に血が出ていた。

高杉は意識が朦朧もろうろうとしていたが、口をあけた。

「テメエのためじゃねえぞ……松陽先生のためだ」

思わぬ言葉に、銀時は思わず驚く。

「え？」

高杉は銀時から眼をそらして言う。

「銀時……テメエが今死んだら……松陽先生が悲しむだろ……」

「高杉……」

「俺アなァ……松陽先生に新しい生き方を見ていけと言われた……自分を犠牲にしても……大切なものを護ること……これが俺の新しい生き方だ」

「……………」

そう言って高杉は、気を失った。

と、同時に銀時は高杉をゆっくり地面に寝かせ、立ち上がった。

その時の銀時の眼は、武神 ” 白夜叉 ” そのものだった。

そう、銀時はこの時すでに ” 白夜叉 ” に覚醒していた。

「うがあああああああああ!!!!!!」

銀時は立ち上がりながら、獣のように体を震わせ、鉛のように重い曇天に向かって雄叫びを上げた。

その雄叫びに、天人はもちろん、桂や坂本、その他の仲間も驚き、その凄まじさに怖気づいた。

「銀……時？」

桂がそう呼びかけると、銀時はフツと……ゆっくり振り返る。

その瞬間、銀時の眼を見た者はすべて凍てつくほどの恐怖に見舞われた。

と同時に、戦慄を感じた。

「お……お前……銀時なのか……？」

桂が眼を疑うほどの凄まじさだった。

銀時は腰の刀を抜いた。

凍り付いていた天人たちもとっさに構える。

「!?!」

しかし、その一瞬で銀時は天人たちの中に紛れ込んだ。

「い……いたぞ!こんなところに……ぐぎゃあ!」

【ズバシヤシヤシヤ!!】

銀時は一気に斬りかかる。

その度、天人の鮮血が噴水の如く飛び散る。

その飛沫が顔にかかりながら、桂と坂本は高杉を安全なところまで運んだ。

桂は、銀時の姿を見て言った。

「あれが……銀時か？」

桂は心底驚いている様子だった。

それに対して、坂本は冷静に言った。

「なんと凄まじい……まさしく ” 白夜叉 ” だ……」

「白夜叉？」

桂は、坂本の言葉に反応した。

「1000年ほど前の神話に出てくる 武神のことじゃ」

何も知らない桂に、坂本は説明を始める。

「神話？」

桂は顔をしかめしながら聞いた。

桂は、神話など胡散臭い話は信じない質だった。
うさん たち

「そいつは人間の姿をした武神で 片手に短刀を持ち たった一人
とうほう にっぽん
で東方日本を制圧したと言われているんじゃない……」

坂本は高杉を岩陰に寝かせ、回りを確認しながら言った。

「一人で？ ふっ そんなこと無理に決まっている ウソ丸出しじゃないか」

桂は、鼻で笑いながら言った。

「まあ聞け その男……銀髪に 鬼のような鋭い眼を持ち その動きは人間のものではなかった……と言われている」

桂は、銀髪と言う言葉にピクリと反応した。

「……………」

「この話と今の銀時……………なんだか似ていると思わんか？」

「ああ……………白夜叉か……………その神話も いささか ウソではないようだな……………」

桂と坂本は刀を片手に持ったまま、暴れる銀時を見護ることしかできなかった。

銀時は、人間にしては疾すぎる動きだった。

前に跳び、脚が付いたと思ったらすでに宙に浮いている。

空中からの落下速度も並じゃない。

ただ、その姿には白夜叉が一番合っていた。

その時、桂がポツリと呟いた。

「その男……銀色の髪に血を浴びて 戦場を駆る姿はまさしく白夜
叉……」

「アイツにピッタリの肩書きじゃな」

白夜叉は戦場を駆る。

ただ無心に天人を斬る。

その動きは人間のものでも、天人のものでもない。

本物の侍のものだった。

願いを叶える流れ星 たった一瞬で三回同じことが言えるわけない（前書き）

久しぶりの投稿です！

お待たせしました！

願いを叶える流れ星 たった一瞬で三回同じことが言えるわけない

“白夜叉”の姿をただ見護る事しかできなかった桂と坂本は、自然と刀を手に強く握っていた。

そんな時、坂本はうつすら笑みをこぼしながら言った。

「行くぜよ……桂 銀時のもとへ加勢に行くんじゃない」

桂は、パツと坂本の顔を見る。

「……その必要はないんじゃないか？ 銀時はさっきから相手からの攻撃に一度も当たっていない……いや かすってさえもないあの疾さだ……俺たちが行っても足手まといになるだけだと思うが……」

坂本は、至ってマジメな顔で言った。

「アイツは……いや ワシらも今この戦いで 体はとくに限界ば超えておる……じゃが 銀時はあれじゃ……銀時があのまま動き続け 普通の体に戻ったら 恐らく体のどこかに支障は出る筈じゃき……今ワシらがアイツに出来る事は 少しでも手助けをすることじゃ」

桂は、握っていた刀をゆっくり引き抜いて言った。

「そうだな……ヤツにおんぶにだっこじゃあ せっかく銀時を護った高杉に申し訳ないな」

「ワシらも 首の皮がつながってる限り 天人^{あいつら}に対抗しよう」

桂は、うんと頷いた。

「よっしゃ！ いくぜよ！」

坂本と桂は、目の前で凄まじい死闘を繰り広げる銀時のもとに走っていった。

しかし。

【ガッ！】

「あ」

【ドゴシャアアア！！】

坂本は、石につまずきダイナミックにこけた。

「だからさっきから何やってんだ アンタはアアアアア！！！！」

桂は迫ってくる天人を食い止めながら坂本に言い放った。

その桂のから空きの横に、天人が切りかかろうとした。

「くっ……！！！」

桂は、心で南無三と唱えた。

「かつっ……！！！」

坂本は、必死で起き上がり、桂をかばいに行った。

その時。

【ガキイン！！】

「ぎっ……」

銀時が、天人の刀を受け止めていた。

「銀時！」

そのまま、蹴りを加えた。

そして坂本は、体勢を立て直した。

三人は背中合わせになった。

「……銀時……まだ正気なら聞いてくれ」

桂は、そう銀時に確認をするように問いかけた。

「ハア……ハア……ハア……」

銀時の息遣いは荒かった。

「次からは 動きを抑えろ……お前の体は今 限界を超えている……
…そのまま闘い続れば 取り返しのつかないことになるぞ……」

桂は銀時の様子を伺うように振り向いた。

「……………」

銀時の眼は、依然真っ直ぐで力強い。

桂はそれを見て、ふっと笑った。

銀時の眼が一度強く閉じ——開いた瞬間。

【ズバシユシユシユ!!】

三人は一斉に斬りかかった。

銀時は、先ほどよりキレはなくなった。

どうやら、桂の言ったことが銀時に届いたようだ。

「うおオオオオオ!!」

戦場に、侍たちの雄叫びが響く——。

それから、一時間ほどの時が経った……。

戦場に残った侍は、銀時・桂・高杉・坂本・山さん・他2名の7人にまで減ってしまった。

対する天人は……0。

銀時は、白夜叉から正常な状態に戻り、まさに地獄の光景を茫然と見ていた。

近くには、微かに息をしている、瀕死の仲間たち……そして、桂や山さんは銀時の後ろで膝を着いていたり、項垂れていたりと、仰向けに倒れていた……。

しかし、その顔には笑顔はおろか、嬉しさの欠片も見えなかった。

戦には勝った……しかし、心に燻ぶる想いは憂い、そして募らせる。

結局……この戦いで得られたものは、何もなかったのだ……。

松陽先生のために参加した攘夷は……結局、大切なものをたくさん失っただけだった……。

銀時、桂、高杉の三人ともそう思っていた。

しかし、口にはしなかった。

しばらくして、銀時がフツと振り返り、歩いていった。

続いて、桂、坂本、山さん、他2人が高杉を連れてきた。

この時、銀時の攘夷戦争は終わったのだ……。

銀時たちは、自分たちの拠点だった山奥の廃寺に戻った。

そこには、先に戻った侍が数人いた。

「この腰抜けどもが!!」

山さんはそう言いたそうな顔だった。

しかし、そんな事を言う気力もなかった。

なのに、そいつらは――。

「おお！ お前ら無事だったか！」

無事なんかじゃない……一体この戦で何人もの侍の尊い命が絶たれたか。

侍だけじゃない、天人でさえあれだけ死んでしまったんだ……。

「いやあ 良かった良かった！ で 勝ったのか！？俺達[・]は？」

その言葉に激昂し、堪忍袋の尾が切れた山さんはそいつに殴りかかろうとした。

が、その山さんの横からもう一つの拳がそいつを捕らえた。

「ぎ……銀時!？」

「テメーら腰抜けが 仲間を見捨てて 勝敗がどうだ聞くなんざ
どういう見だ」

銀時は静かに憤怒していた。

この時、桂たちは悔いていた。

——銀時にどう言葉をかけてやればいい？

俺たちが実感した、このやるせなさ……。

なにも得ることができなかった、この失望感……。

俺たちも苦しい……だが、一番苦しいのは……。

「銀時……」

桂は思わず銀時の名前を口から漏らしたが、銀時は両拳を握り、ただ俯いていた……。

自分と敵と仲間の血がついた身体が、小さく震えた。

その夜……坂本が、銀時を誘った。

銀時たちのことなんて何も知らない様に、輝かしく、そして美しく
きらめく満天の星々が散らばった夜空が銀時と坂本の心と身体を洗
ってくれるようだ。

銀時と坂本は、廃寺の屋根の上にいた。

「銀時……おんしゃ 大変じゃったなァ」

「あ？ 何のことだ？」

銀時は寝転がり、坂本は座って話していた。

「桂から聞いたぜよ……全部な」

坂本は、銀時の顔を見ながら言った。

「チツ……余計なことを…」

銀時は、頭を掻きながら言った。

「おんしゃ……もう攘夷はやめる気じゃろ？」

坂本の唐突な問いに銀時は、眉をピクリと動かすだけで、そのまましばらく黙り込んだ。

「……ああ だったらどうすんだっつーんだよ？ 止めるのか？」

坂本は腕を組み、目をつぶっていった。

「いいや わしゃ止めんよ……」

「？」

その言葉は、坂本の決意の言葉でもあった。

「銀時……わしも同じじゃ」

「……………」

夜空にひとつ、流れ星が現れた。

一瞬だったが、その一瞬の星の光線がとても綺麗だった。

「わしゃ あの流れ星のようになりたくないんじや 一度輝いてもすぐに消えてしまうようなら わしゃ もっと違う生き方をしたいんじや いっそ そんな流れ星たちを すくいあげてやりたいんじや」

そう言う坂本の顔は、イキイキしている。

それに、どこか晴れ晴れしているようだった。

「……………」

銀時は目をつぶる。

「決めた わしゃ宙そらに行くぜよ」

坂本は、パツと目を開いた。

「……………」

「このまま地べたはいずり回って 天人と戦ったところで 先は見えちよる…… わしらがこうしちよる間にも 天人はじゃんじゃん地球にきちよるきに 押しよせる時代の波にはさからえんぜよ」

「……………」

「こんな戦は いたずらに仲間 死ににいかせるだけじゃ……わしゃ もう仲間が死ぬところは見たくない」

坂本もまた、銀時と同じような気持ちになっていた。

「これからはもっと高い視点をもって生きねばダメじゃ　そう
地球人も天人も……いや星さえも見わたせる高い視点の……
だからわしや宙そらにいく」

坂本は、ふと目だけ動かして宙そらをみた。

「宇宙にでかい船浮かべて　星ごとすくいあげる漁をするんじゃ」

坂本は、そう言い終わると一度目を閉じ、ふっと微笑み銀時の方を
見て話し出した。

「どうじゃ銀時？　おんしゃ　この狭か星にとじこめておくには勿
体ないデカか男じゃけー　わしと一緒に……」

「ぐー　ぐー……」

銀時はいつからか、寝入ってしまった。

「アッハッハッハッハッ！　天よオ！！　コイツに隕石ば
叩きおとしてくださーいアッハッハッハッ！」

坂本の笑い声は、夜空に響いた。

――そして夜が明けた。

願いを叶える流れ星 たった一瞬で三回同じことが言えるわけない（後書き）

ここまで読んでくださって、ありがとうございます^^

さて、ちょっと余談ですが、今身近なアニメや漫画が消えようとしているのを、あなたは知っていますか？

詳しくは、私が書いた「人権擁護法」を見てください。

コメントとか、皆さんの意見をお願いします！

護る物（前書き）

受験が終わりました。

すぐに次の話も完成させます！

楽しみにしている方のためにも、がんばりますので、最後まで応援
お願いします！！

護る物

――――朝。

今日も江戸は晴天で、平和な日がまた始まるのだ。

万事屋ファミリー、銀時と神楽に定春は、まだ夢の中であった。

特に銀時は、帰りが遅かったため、深い眠りにについている。

そんな中、新八がやってくる。

「おはようございまーす！」

当然の如く、銀時や神楽は深い眠りに就いていて、返事は返ってこない。

新八は、今日もまた変わらない一日が始まったことを痛感するともに、たまには「おはよう」と返してきてくれないのかと思うのだった。

今度は定春の尻尾に注意して戸を開け、神楽を起こしにかかる。

「神楽ちゃん 朝だよ！ 起きて！」

「うるっさいアル メガネ叩き割って地味なキャラにしてやろーか」

「何？ 寝言？ 泣いていい？」

新八は、とりあえず神樂を起こして、銀時のいる和室に向かう。

「……そういえば 銀さん昨日の夜は帰って来なかったな……ちゃんというかな？」

新八は、和室の襖をそつと開ける。

すると同時に、酒の独特な臭いが新八の鼻を突く。

そんな酒の臭いが充満した部屋の中心に、銀時が寝ていた。

「ほっ……良かった 銀さん！ どこ行ってたんですか！？ ほら、起きてください！」

新八は襖の前で銀時を起こすために大声を張り出す。

「うるせーよ新八 寝かせろよ 俺ア二日酔いで気持ちワリーんだよオ」

それに対して銀時は、布団に潜りながら答える。

新八は昨日の昼あたりからいなくなった銀時に疑問を投げかける。

「まさか 昨日ずっと飲んでたんですか！？」

凶星な銀時はのっそり起き上がり、頭を掻き、あくびをしながら新八に反論する。

「んだよ ワリーかよ 大人にはなァ 飲んで嫌な事を忘れたい時があるんだよオ……例えば 新八が最近調子こいてるとか 新八が

最近ツツコミを入れるとか 新八が最近シスコンとか」

銀時の言葉に新八は苛立ちながら講義する。

「新八ばっかじゃねーか！ そんなに僕が嫌か！ 忘れたい事って僕の事かアアア！？」

今度は、銀時は耳をほじくりながら追加攻撃を加える。

「騒ぐな 新八 ただでさえツツコミメガネな地味キャラで さらに少しでも目立とうとして大きな声を出しているお前が さらに！ さらにだぞ？ そんな大きな声を出したら……ウゼーだろ？」

苛立った新八は調子に乗ってしまったようで、銀時に自分のことを肥大させて反論する。

「嫌味が長いんだよオオオオ！！ つーか 目立とうとしてねーし！ 僕の場合目立たないようにしているだけだから！！ しかも最終的にウザいんじゃないかアアアア！！」

鼻をほじりながら聞いていた銀時は、めんどくさくなった様な口調で言った。

「わかった わかった！ もうわかったから！ 要するに新八はメガネを取るとカッコ良くて強くて人気があって 全然ウザくないキヤラに だーいへーんしーん！ するわけだな」

新八は自分の言った事をさらに肥大させられ、少しあせった表情で言う。

「え？ いや……あの ハードル高すぎじゃ……もう少し低いほうが……」

新八の弁解虚しく、銀時は布団に潜りながら、言う。

「わかった OK じゃ寝かせてくれや ダメガネ」

最後までダメガネだった新八は最後にもツツコミを入れる。

「結局ダメガネじゃん！ ダメじゃん！」

新八は最後の最後までダメガネだった……。

「まったく……早く起きてくださいよ！」

そうして、新八は銀時の部屋から出て行った。

銀時は、布団の中で過去の回想を始める。

「何だと!？」

桂が声を上げる。

「銀時! テメエもう一片言ってみろ!!」

高杉は銀時に強い口調で言う。

「だーからア 俺アもう攘夷やめるつつてんだよ ついでに言っとくけど 坂本もやめるってよ」

銀時は他の侍たちに面と向かって言う。

「な……!?! 坂本まで!?! 本当なのか」

山さんは、坂本に問う。

「おー おんしゃらには本当に悪いがのー」

坂本は、アッハッハ。と控えめに笑う。

昨日の一戦で片目を失い、包帯で左目を覆う高杉は、銀時の胸倉を掴み上げた。

「テメエ……銀時!! テメエが一番天人を憎んでるはずだ……! なのに……何故だ!!」

銀時は高杉に掴まれながらしばらく俯く。

「…………だよ……」

「ああ？」

銀時は、俯いたまま思った事を言う。

「これ以上……俺たちが天人に何をやったって意味がねーんだって……何も変わらねーんだって わかったんだよ……」

「……………！！」

それを聞いて高杉は、銀時をパツと放した。

てっきり殴られるかと思っていた銀時は、少し不思議に思う。

高杉は背を向け、銀時の方を一度も見ずに言った。

「そこまで腑抜けだとは思ってなかったぜ……！ 今のテメエの言葉聞いたら 松陽先生が泣くぜ ……結局テメエはあの腰抜け侍どもと何一つ変わってなかったわけだ」

その一言に、銀時はピクツと反応した。

「オイ 高杉！ なにもそこまで……」

桂が高杉を止めるが、高杉は言った。

「テメエ 最初俺たちに言った事覚えてるか？」

『俺たちが一番怖^{おそ}れているのは 天人の言いなりになり 自分^{テメー}の命しか護れねーような……幕府のヤツらみたいになっちまうことだろ？俺たちで幕府のヤツらに喝を入れてやろーじゃねえの』

銀時は黙り込む。

「……………」

「テメエは今 テメーの命しか護れてねーじゃねエか！ 怖気付いてるのはテメーじゃねえか！ テメエなんか庇った俺がバカらしいぜ！」

それを聞いた桂は、高杉を強い口調で止めた。

「オイ高杉！ いい加減にしろ！ 銀時だってそんなことを……！！」

高杉は吐き捨てるように行った。

「同志だと思っていた……銀時ィ……テメエは殴るにも値しねエ……俺の目の前から消えろ 目障りだ」

そう言って高杉は一度も振り返らず、廃寺の奥に行ってしまった。

高杉の逆鱗に触れた銀時は、一言残した。

「今さら理解してもらえとは思ってなかったが……こんなにも高

杉が当たってくるとはな……」

銀時は身支度を始めた。

桂たちは、その後姿を黙って見るだけだった。

そのころ、高杉は。

「（……何が自分を犠牲にしても大切なものを護ることが新しい生き方だ……馬鹿馬鹿しい……ぶっ壊してやる……この世界を……何もかもぶっ壊してやる……！！）」

高杉は、そう心に決め、刀の手入れを始めた――。

しかしこの後高杉は、鬼兵隊を立ち上げ、銀時の時のように仲間を想う気持ちを持つわけだが、それはまだ後の話だ……。

護る物（後書き）

突然すいません！

えー、これを見ている、『リラ』さん！！

勝手に名前を出してすみません！

誤って、いただいた感想を完全削除してしまいました！！

悪気があってやったわけではありません！すいません！

あと、評価感想ありがとうございました！

自分の親の友達の子どもと友達に　これって絶対法則（前書き）

とりあえず、順調です。

そろそろ最終章です。

自分の親の友達の子どもと友達に　これって絶対法則

しばらくして、銀時より先に身支度を終えた坂本を見送りに銀時、桂、山さん、他の侍が来ていた。

しかし、高杉だけはその場にいなかった。

「そうか……やっぱり帰るか」

桂は、まだ納得しているようではなかったが、止める様子は無かった。

「ああ……おんしゃらと戦えて　わしゃ幸せだった……ところで高杉は……」

桂に代わり、山さんが答える。

「ああ……やはり来ないようだ……」

坂本は、アハハと寂しそうに笑う。

「そうか……あいつにも来てもらいたかったんじゃが……」

山さんは、坂本を慰めるように言う。

「……まア　仕方ないさ」

それに坂本はウンと頷き、銀時に目をやる。

「……ところで 銀時 おんしゃは出発の準備しなくて良いのか？」

銀時は、腕を組みながら答える。

「ああ……俺はもうちょっと時間がかかりそうなんだな」

坂本は、「そうか……」と口にした。

しばしの沈黙が続く。

そこで、銀時は口をあける。

「ちょっと坂本と二人で話しがしてーんだ お前らちょっと席をはずしてくれねーか？」

桂たちは躊躇なく、すぐに銀時の言葉に従った。

「ああ……じゃあ ここで別れを告げよう じゃあな坂本 達者だな」

山さんが別れを告げる。

「また会える日を心待ちにしているぞ」

桂も、微笑み別れを告げる。

「ああ おんしゃらも元気でな！」

坂本は、みんなに向かって手を振る。

そうして銀時と坂本以外は廃寺に戻った。

「……で 銀時 話ってなんじゃ？」

銀時は坂本の目をを真っ直ぐ見ながら答える。

「お前が攘夷に参加した理由を聞きてーんだ」

坂本から笑みが消える。

「お前は何故俺にばかりかまう？ 何故俺に秘密を打ち明ける？
何故お前は攘夷運動を始めたんだ？」

唐突——。というには、銀時の言葉には重みがありすぎたように坂本は感じた。

坂本は、得意の笑顔なしに話し始める。

「銀時……わしの話を聞いてくれるか？」

銀時は、「ああ」とだけ答えた。

坂本はそれを確認し、話を続ける。

「わしの父上は 昔 とても気の合う友がいたじゃ……それこそ
しょちゅう喧嘩もするし一緒に笑っていたりもした 幼心ながらも
そんな二人の関係が わしや羨ましかった……」

何を言っているのか。と思ったが、銀時は黙って聞いていた。

「……………」

「しかし ある日 父上の唯一無二の友は 天人によって殺された……」

銀時は「……………」と考えた後、ハッと思いつく。

「まさか……！」

坂本は、カッといつにもなく強い眼差しで銀時を見ながら言う。

「その唯一無二の友の名は 金太郎！ ……いや 坂田金時！ ……お前の父親じゃろ？」

銀時は、すぐにたくさんの疑問を浮かべる。

「……お前！ なんで……！」

そこで言葉を詰まらせる。

「わしの父上も 殿様の側近だったんじゃない！」

それぐらい、話からしてわかっていた。

しかし。

「そんな……じゃあ お前の父親は今……！？」

銀時の一番大きな疑問だった。

「今も変わらず側近という大役をこなしている……」

その言葉が棘となり、銀時の心を刺す。

「何だと!?!」

しかし、すぐに坂本は説明を加える。

「勘違いするな! わしの父上は おんしゃの父上と一緒に殿様を
かくまった! ……しかし……!!」

十数年前?? 江戸城……。

「一体なんなんだ! あの船は!?!」

「大砲を撃ってくるぞ! なんなんだあの光の塊は!?!」

家来たちが慌てふためく中、金時は冷静に対処した。

「あわてるな! 自身より先に殿を護れエエエエ! 絶対に殿に傷
一つつけるな!?!」

坂本の父である、坂本 へいはちろう 平八郎はすぐに行動に移した。

「そこだ！ 奥の部屋を使え！ 早く！」

そうして二人で、殿様の身を隠そうとしたが、誰よりも慌てていた殿様は転んでしまった。

「しまった！ 殿！！」

「くそっ……早く避難を……！！！」

その時だった。

「うわアアアアア！ 砲丸がこちらに向かってくるぞ！」

一人の家来がそう叫んだ。

「くっ……！！」

一瞬の判断だった。

金時は、殿様と平八郎を奥の部屋に突き飛ばした。

「なっ……！！？ 金時！？」

殿様と平八郎は金時のほうを見た。

その時、金時は片膝を着き、ふっと笑っていた。

平八郎と殿様の前に、太い光線が走った。

【ドゴオオオオオオオオオン!!】

たまらず、平八郎と殿様は後ろに倒れた。

そして、その光線はものの数秒で消え、目の前にはえぐられた痕と
焼け焦げた臭いだけが残っていた。

「金時イイイイイイイイ!!!!!!」

自分の親の友達の子どもと友達に　これって絶対法則（後書き）

次回……最終章！？

階段は足元に注意しろ（前書き）

明日の８時に最終話を投稿します！

応援ありがとうございました！！

階段は足元に注意しろ

坂本が、坂本の父と銀時の父の昔話を話し終えると、弁解を始めた。

「わしの父上は その事件の後 酷く悔やんでいた……殿様を護れ
ても 唯一無二の友を護れなかった事を……」

坂本は、ずっと項垂れていた。

「……………」

「おんしやの父上にとつても わしの父上は唯一無二の友だった……
わしや父上から おんしやが吉田松陽殿に預けられている事も
何もかも聞かされていた…… そして わしの父上は吉田 松陽
殿と会い 密かに文通もしていた……」

「それを……なんで今まで……」

「悪かったな……でも この話しには もっと重要な事がある……」

「……聞かせてくれ」

坂本は階段に腰を掛けた。

それを見て、銀時も階段に腰を掛けた。

「ある日…… 父上と松陽殿と密かに行っていた文通が 幕府おかみにバ
レてしまったんじゃない……」

「！」

銀時は、バツと坂本に顔を向ける。

「しかも情けない事に わしの父上は そのことを過激思想家である吉田松陽を欺くためだと偽り 自分への難を逃れたのだ……」

「な なんだと……!？」

銀時は、拳を強く握っていた。

「本当に申し訳ない 全てわしの父上が原因じゃ…… わしの父上はとても悔やんでいる 悔やんでも悔やみきれない こんな私がのうのうと生きていて良いのか といつも口に行っているき」

銀時は、強く握っていた拳を解いた。

「俺の親父の死は仕方ないが……松陽先生の死は……」

坂本は空を見上げた。

「……『過激思想家 吉田松陽打ち首』……わしの父上は冷静じゃった すぐにおんしゃの行動を読んだ わしをすぐに攘夷運動に参加させた……」

銀時はすぐに返す。

「……で お前は父親の代わりに詫びにでも来たのか？」

「そりゃ わしも驚いたぜよ 剣術はそこそだったが 急だった んじゃからの……詫びるというか おんしゃに真実を知らせる事に意味があった」

「意味？」

「ああ これはわしみみたいな楽天家の勝手な考えじゃが…… わしの父上とおんしゃの父上が会わなければ はたまた わしの父上が松陽殿と文通などしていなければ 今のおんしゃとわしはこの場にいはいはずじゃ わしとおんしゃは会わなかったはずじゃ わしやお前に会えてよかったぜよ だが わしの父上の件は本当にすまなかったと思っているきー あっはっはっはっは」

坂本が高らかに笑うと、銀時は少し血管を浮かばせながら言った。

「本当にすまねーと思ってんのかコイツ？」

そういうと、銀時は立ち上がり、尻を叩いて廃寺の門の前に立った。

「つーかよ……そんなめんどくせー事 もういいじゃねーか 俺の親父の死は仕方ねーし 松陽先生の死は 松陽先生も文通がばれるのもわかってたんだろーしよ」

銀時がそういうと、さらに高らかに笑う坂本がいた。

「あっはっは おんしゃも十分楽天家じゃきー おんしゃに会えて良かったぜよ！ お前が地球に残ってくれるんじゃから わしも安心じゃー」

その言葉を聞き、銀時は思い出したように言う。

「そうだ お前 本当に宇宙に行くのか？」

「ああ ……そうじゃ銀時 おんしゃも一緒にどうじゃ？ 一緒にでかか漁をせんか？」

その誘いの言葉に、銀時は、黙って首を振った。

「……………そーか お前がおりゃあ面白か漁になると思っちよったんだがのゝ」

「ワリーな こう見えても地球こゝちが好きでね」

銀時はふつと微笑む。

「宇宙でもどこでもいって暴れ回ってこいよ おめーにゃちまい漁なんて似合わねー でけー網 宇宙にブン投げて星でも何でも釣りあげりゃいい」

坂本は、それを聞いて銀時に聞き返す。

「…おんしゃこれからどうするがか？」

「俺か？ そーさな」

そこで、銀時はふと空を見上げる。

「俺ア のんびり地球こゝちで釣り糸たらすさ 地べた落っこっちゃまった流れ星でも釣りあげて もっぺん宙にリリースよ」

そう言って、銀時は坂本に向かって笑みを浮かべた。

それに、坂本も笑って返す。

「アッハッハ！ おんしやは本当に何を考えてるんじゃないか わからんのー！ アッハッハッハ！」

「……まだ行かなくていいのか？」

「あー 楽しくて時間がたつの忘れていたときに じゃあ わしやこれで！」

「ああ 達者でな 辰馬」

[illegible]

坂本は、階段の何もないところで転び――。

階段から転げ落ちていった。

「……あえて何も言わねーぞ」

銀時が、廃寺に戻ってきた。

第一に、銀時は高杉の事を桂に聞く。

「……高杉は……」

桂は首を振る。

「いや……相変わらずだ」

「そうか……」と、銀時は呟き、置いてあった自分の荷物と刀を手に取り、荷物を肩に掛け、刀を腰に差した。

「……まア お前らに攘夷に参加しようと言ったのは俺だ あいつは悪くねェ 俺を軽蔑してくれ」

「坂田 お前も迷った上での決断だろう 誰も止めやしないさ お前は俺たち侍に 攘夷に十分貢献してくれた 感謝している ありがとう」

「銀時 また会う時はともに話しをしようじゃないか」

「ああ……その時お前が生きていたらな」

「今 貴様の息の根を止めてやろうか？」

桂が今にも銀時を襲おうとしていた時。

「オイ……銀時ィ」

「!!」

高杉が現れた。

「高杉！」

「よォ テメエが攘夷やめるっつー件だが……その話 許してやるぜ……」

「……何だと？」

「だが 俺はお前の全てを許したわけじゃねェ 今回だけは目を瞑るっつーだけさ」

「オイ高杉！ 貴様 何様のつもっ……！！！」

桂がそういいかけると、銀時は桂の前に出て行った。

「ヅラ……ちょっと黙ってろ」

「銀時……！！」

高杉は話を続ける。

「俺はもうテメエと今のような状況で話す事はねーだろうし 昔話をすることもねーだろ」

「……何が言いてェんだ テメエ」

「正直……悲しいぜ」

「あ？」

「共に国を憂い 戦場で戦える それが俺の喜びでもあった……」

「……………」

「なのに テメエは……俺を裏切った！ 共に松陽先生を想い 同じ道を歩んでたと思っていた！ テメエは……——！！！」

そこで、高杉は齒を食いしぼり、気を静めた。

「……これ以上話していたら 刀を抜きそうになる……話はこれだけだ……さっさと失せろ」

そう言って高杉は、また廃寺の奥に行ってしまった。

「……………高杉……………」

そこにいた銀時らに、しばし沈黙が続いた。

十分後。

「じゃあ 俺ア もう行くぜ」

銀時は、さっきの坂本と同じ立場にあった。

「ああ……達者でな 銀時」

山さんが、別れを惜しむ。

「お前ら 絶対死ぬんじゃないぞ」

「もちろんだ」

「また会う時は お互い地で会おう」

桂が腕を組みながら、銀時に言う。

「何度も言うが 天国や地獄はゴメンこうむるぞ」

そろそろ行くぞ、と銀時は言って、階段を降り始める。

「……じゃあな」

桂の言葉に、銀時はただ右手を上げて一言言った。

「ああ」

銀時は、階段を下りて行った。

その際、銀時は一度も振り返らなかった。

その後ろ姿を、桂たちは消えるまで見送った。

「……………あいつらがいなくても 俺たちは絶対天人には負けちゃいけない エ この国にまた侍の時代が来たとき あいつらだけでなく俺らも褒め称えられるように 今を戦おう…… なア 桂よ」

「はい」

山さんたちは、廃寺に戻っていった。

——しかしその、数日後。

侍たちを恐れた天人は、廃刀令を出し、完全に侍の地位を奪い、そして侍滅亡への道を築き、人類を侍の必要が無い世界へと誘った。^{いざな}

事実、この数年後には、江戸はメガロポリスと呼ばれるまでに進化を成し遂げ、近未来の世界へと変わった。

階段は足元に注意しろ（後書き）

次話、遂に完結！！

銀魂 攘夷篇！！

誰もが一生を通して背負うもの（前書き）

すいません！

予定時刻を過ぎてしまいました！

祖母が倒れてしまって・・・。

最終話です m () m

ご心配掛けました！

誰もが一生を通して背負うもの

「ああ〜あアア！！　よく寝たなア　それに　だいぶ頭痛治ってきたし」

銀時はあくび&伸びをしながら、のっそりと起きてきた。

「あ　銀さんやっと起きた　早く朝ごはん食べてください！　仕事遅れちゃいますよ！」

客間には、新八と神楽、定春がいた。

新八は、ちょうど銀時の茶碗にご飯をつけていた。

「仕事って　お前　今日は依頼来てねーだろ」

銀時がそういうと、新八は、ご飯をつけ終わったようで、自分のご飯を口に運びながら言った。

「依頼人が来るかもしれないじゃないですか！」

銀時は自分の席に座った。

「あーそうかなア　あ　そうだ新八イ」

新八は箸を止める。

「？　なんですか？」

「昨日の俺の過去の話なんだが……」

銀時は、自分のご飯を口に運びながらそういう。

神楽は、炊飯器の中のご飯を食べ始めた。

「え！？ 話してくれるんですか！？」

「ああ……俺ア——……」

その時、万事屋に電話が一本かかる。

「あ……」

すぐに新八は受話器を取る。

「はい 万事屋銀ちゃんです！ ……はい……そうです。 ……
ハイ！ わかりました！ すぐにそちらへ向かいます！ では失礼
します！ ……銀さん！ 依頼です！」

銀時と神楽は、ご飯を口の中に勢い良くかつ込む。

「久しぶりの依頼だなア どちらさんから？」

「かぶき町に住んでいるお偉いさんの近辺護衛らしいです！」

「はア？ 久しぶりの依頼が護衛かよ」

「成功すれば報酬は弾むそうです」

「デメエらアアア!! モタモタしてんじゃねエエエエ!!
さっさと護衛に行くぞオオオオオ!!」

いつのまにやら、銀時は着替えながら玄関で靴を履いていた。

「早っ! 何でお金のことになるとあの人行動が早いのか!」

すぐに、新八と神楽と定春も準備を終えた。

「オーケーー んじゃ 行くとしますか! ぱっつあん! 神楽!」

「定春もネ!」

「わん!」

銀時はバイク、新八は銀時の後ろにまたがり、神楽は定春の上に乗った。

「銀さん! 過去の話はどうなるんですか!」

「あー!? その話はまた今度だ!」

「今度っていつですか!? アンタいつもそうやって後回しじゃないですか!」

「うるせーんだよ！ あーお前は何でいつもそうなのかな！？ だ
からいつまで経っても『新一』じゃなくて『新八』なんだよオオオ
オオオ！！」

「オイイイイイ！ 新八で何が悪いんだアアア！？ 言ってみろ
オオオオオ！」

銀時と新八がギャーギャーやっていると、後ろからポリスメンがパト
カーに乗って追ってくる。

「あ！ コラ！ その白髪！ テメエヘルメットかぶれバカヤロ
ー！ あとそのチャイナ服は犬に乗って公道走るな！！ 止まれ
！」

銀時たちに向かってポリスメンは注意をする。

が、銀時たちはそんなのお構いなしで、走る。

新八は、ポリスメンに向かって言い放つ。

「スンマセン おまわりさーん！ 僕たち急いでるんで！」

続いて、銀時も。

「そういうことだ 見逃してくれや」

さらに毒舌神楽ちゃんも続く。

「私たちの邪魔したら ぶっとばすアル！」

しかし。いや、やはりポリスメンの反感を買うだけだった。

「そんな言い訳が聞けるか！ 止まれバカヤロー！」

全速力で警察を振り切り、銀時たちは依頼人の下へと向かった。

『あつたらあつたでめんどくせエ でも それがなかったらつまらねえ どうせつまらねエし めんどくせエ今の世界なら 昔のように それを背負っていたほうが俺アいい——もう昔のように失った りしねエ…… 絶対に護り抜く それが 俺の生き方だ』

「どくもく 万事屋でくす」

!

完

誰もが一生を通して背負うもの（後書き）

ここまで読んでくださって、ありがとうございました！

えー、この『銀魂 攘夷篇』を読んでくださった方々、評価・感想を送ってくださった方々、そして、陰ながら私を支えてくださった方々、ありがとうございます！

連載を決めた当時、銀時たちの過去を勝手に回想して、小説にして、罵声を浴びられると思っていました。

ですが、読者様は、最後まで温かい目で見てくださり、私はここまですてきました！

最後に。

本当にありがとうございます！

これから銀魂をよろしく願います！

念願の1位!! (前書き)

あ、えっと。クロフォードです。

こんなオマケ見たいのを見てくださって、ありがとうございます。

ご報告です。

是非、ご覧ください！

念願の1位!!

えー、いきなりスイマセン。

『銀魂 攘夷篇』他、銀魂FF作品を書かせて頂いています、クロフォードです。

本日はお知らせが二つ。

本作品、『銀魂 攘夷篇』ですが、今日読者数を確認しました。

皆々様のおかげで、27000アクセス突破いたしました。

少ないかもしれませんが、こんなにアクセスしてくださって、本当に感激です。

銀魂を好きでいてよかったと思い、また皆々様に御礼の言葉を申し上げます。

FF小説ランキングで、キーワード銀魂で調べたところ、私の小説が……。

なんと、念願の1位に!!

感無量です(T▽T)

ついにやりました!目標達成です!

ごめんなさい。ちょっとだけはしゃがせていただきたいのです。

いや、主力作家の方々がいなかったのもありますが……。

ですが、私はいずれ、この銀魂FFの小説で、FF作品の中で一位を獲ります。

そのためには、より多くの作者様に、より多くの作品を投稿してもらい、楽しくかつ熾烈な争いを繰り広げたいのです。

ここまで読んでくださった読者様、ありがとうございました。

ここまで読んでくださった銀魂FF作者様、共にがんばりましょう。

銀魂FFで、ここまでこれたことにも感謝感激しております。

読者様、そして評価感想を送って頂いた方々には、本当に感謝しております！

あと、評価・感想送ってくれた『リラ』さん。

アナタの評価・感想、誤って消しちゃって本当にすみませんでした！

本当に嬉しかったのに……すいません。

銀魂を愛する方々に、しつこいようですが、御礼の言葉を申し上げます。

本当に感謝しております。

ありがとうございました。

そして、今後とも銀魂を大好きでいてください。

それが私からの一番の望みです。

それでは、長々と続きましたが、御礼とご報告を読んでもくださり、ありがとうございます！

念願の1位!! (後書き)

ありがとうございました!

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5913f/>

銀魂 攘夷篇

2010年10月8日23時58分発行